



通信

第 127 号 2020. 10. 22

公益社団法人 福島原発行動隊

東京都千代田区神田淡路町1-21-7

静和ビル 1階A室 〒101-0063

Tel: 03-3255-5910 Fax: 03-3525-4811

Mail: svcf-admin@svcf.jp Web: <http://svcf.jp>

転居された方は事務局 (svcf-admin@svcf.jp) まで転居先をお知らせください

計 報

森哲雄さんがお亡くなりになりました。

「白い髭を長く伸ばしたおじいさん」と言えば、「ああ、あの人か」と思い当たる方も大勢いらっしゃるでしょう。

森さんは長年にわたって住友金属本社の技術管理部に勤務し、技術情報の分析に従事しました。行動隊が結成されると「原発ウォッチャー」チームに加わり、現役時代の経験を生かして福島第一原発の現状分析に携わりました。その実績は行動隊のウェブサイトでも見ることができます。

<http://svcf.jp/archives/category/activity/watcher>



森さん、ありがとうございました。さようなら。

第 95 回院内集会(9 月 24 日開催)

「東京電力福島第一原子力発電所廃炉事業の現況」報告

今回の院内集会は、参議院議員会館 102 号室に、東京電力ホールディングス(株)広報ユニット 広報室/立地地域部原子力センター課長 今井賢樹氏、同企画室課長 岩崎悠氏、原子力損害賠償・廃炉等支援機構廃炉総括グループ審議役 伊藤隆庸氏、同技術グループ審議役 多賀谷朋宏氏、経済産業省資源エネルギー庁電力・ガス事業部原子力発電所事故収束対応室課長補佐 佐藤徹氏を講師としてお招きし、標記のテーマについて講演をいただき、質疑を交わしました。またコロナ禍に鑑み、オンライン集会(zoom)を並行して行いました。

各講師の講演は提供資料に沿って行われましたので、講演内容については講師提供資料をご覧ください。講師提供資料：<http://svcf.jp/archives/7558>



(講演後の質疑の概要)

＜問い＞ロードマップに照らして、現在までの進捗状況はどのように評価できるか。

＜答え＞使用済み燃料の取り出し開始の遅れなど、一部に遅れはあるものの、全体として着実に進んでいる。

＜問い＞過去一年の廃炉事業のなかで特筆す

べき事柄はどのようなことであったか。

＜答え＞遠隔作業であった3号機使用済燃料プールからの燃料取り出し、並びに極めて困難であった1/2号機排気筒解体作業については作業開始当初のトラブルはあったものの、その後は順調に作業が進み、前者は予定通り年度内の完了

予定で、後者はやや予定より遅れたものの今年5月に完了したこと。さらに後者は地元企業のエイブル様に元請として対応していただけたことが、大きな成果として挙げられる。

＜問い＞3号機圧力抑制室(S/C)内包水のサンプリングについて、これまでの過程から圧力抑制室内包水は極めて高い濃度の放射性物質を含むと思われるが、将来、どのような手順で3号機原子炉格納器水位を低下させる計画か。



＜答え＞格納容器内水位が高く、内包水の放射性濃度も高いと想定されることから、今回提示した2つのSTEPについて慎重に作業を進めることで、徐々に水位を下げていく計画である。作業を進めていくのに伴い分からないことが次々に生じてくる。状況に応じてやり方を変え逐次水位を下げていくことに努める。

＜問い＞これまでの廃炉作業の経緯からして、福島原発行動隊による協力、協働の申し入れが実現すると考えられる今後の作業にはどんなものがあり得るか。

＜答え＞原発構内に入って廃炉作業に加わるこ

とを行動隊に直接お願いすることは難しい。請負会社の作業として加わることを考えていただきたい。「協力」ということでは、ALPS処理水の問題について行動隊の皆さんから周りのひとびとに客観的に伝えていただくといったことがある。

＜問い＞原子力発電所の廃炉等に必要な技術者の養成はどのようにおこなわれているか。

＜答え＞原子力に関心を持つ若い人が少ない。大学においても原子力工学の学科を志望する学生が減っており、人材育成は重要な問題だ。廃炉等支援機構は、2019年から富岡町で「廃炉人材育成研修」を行っている。今年度はコロナのこともあってまだ実施していないが、webを活用した研修も進めていきたい。この研修の対象者は福島第一原子力発電所の廃炉作業に現に携わっている、又は、今後携わる予定の技術者・研究者である。

＜問い＞日本原子力学会は福島第一原子力発電所廃炉検討委員会の報告書(2020/7/21)には次の記述があります。

事故を起こした原子力施設や広範な汚染のある原子力施設の廃炉を進めるには、最終的な状態(以下、エンドステートといいます)をあらかじめ設定することが国際的にも重要とされています。このようなエンドステートの設定は、廃炉に係る複雑かつ多様な課題を如何に解決するのかということ、また、福島復興の将来像をどう考えるのかということと綿密に関係しており、ステークホルダー間で話し合うことが必要となります

これを機に、福島地元関係者等と「最終的な状態」について話し合いをすべきではないか。最終状態をどうするかは、今どうするかにつながっている。

＜答え＞「話し合い」を具体的にどのように行うかは、まだわからないが、検討したい。

開館した「東日本大震災・原子力災害伝承館」

会員 山田次郎

帰還困難地域(富岡町)の避難者宅草刈の後、今年9月20日に双葉町にオープンした伝承館を見学しました。双葉町中野高田にある大変広大な敷地に建てられています。6つのコーナーで3.11に起きた災害状況とそこで必死に作業・暮らし・避難・帰還をされた方々の痕跡が展示されていました。

印象に残ったのは、国・県・自治体・警察・消防・

自衛隊がどんな対応をしてきたかを示す年表のような展示があったのですが、そこに東京電力の記載はありませんでした。実際に経験をされた地元民や我々のように現地の様子を9年間見てきた者にとってはいささか物足りなさを感じましたが、それでも10年20年と残し続けることの意味は大きいと感じました。建物2階の大きな窓から見える隣地の二階建て住宅の1階部分が鉄骨柱だけ

残してスッポ抜けているのが当時の津波の為だと聞いて、それこそが痕跡碑だと思いました。

【東日本大震災・原子力災害伝承館】

福島県双葉町大字中野高田 39 (電話:0240-23-4402)

常磐線双葉駅から 2 km、東電福島第一原発から約 5 km

福島県設立、(公財)福島イノベーション・コースト構想推進機構 運営管理

開館 09:00-17:00 (定休日 火曜) 大人:600 円
小中高生:300 円



10 月 2 日～7 日福島行動報告

会員 安藤 博



【川内村ぶどう初出荷を伝える地元紙『福島民報』の 10 月 5 日記事】

10 月 2 日(金)の早朝、市川市の自宅を出て、7 日(水)までの 5 泊 6 日で福島復興支援の作業に向かいました。安藤博、杉山隆保、高橋済、山田次郎の 4 人。6 日(火)には白河の添田恵子さんも加わって 5 人。支援作業は、3～4 日が富岡町と大熊町の帰還困難区域内に残されている避難者宅の保守(除草等)、5～7 日は川内村のぶどう園育成事業です。

【避難者宅の保守】

富岡町の方は須賀川市、大熊町の方はいわき市で避難生活を送っておられて、帰宅を許される月に一度、残してある自宅に約 1 時間をかけて出向き雨戸をあけることに始まる保守作業に当たっておられます。立ち入り禁止を解除されていく区域とわずか 50～100m の差で解除されないままであることに割り切れぬ思いを持たれているでしょう。しかし、いらだちをあからさまされることはなく、と

はいえ決してあきらめずに自宅を守り帰宅する日を待っておられます。

【川内村のぶどう園育成事業】

川内村ぶどう園(かわうちワイン株式会社)は、10 月 4 日には約 550 キロ、5 日には約 60 キロのシャルドネを、それぞれ山梨と新潟のワイナリーに出荷しました。川

内村の猪狩貢副村長(「かわうちワイン」社長)は、ぶどう樹を雨害から守っていたビニールシート(レインガード)を、収穫し終えた樹から撤去する作業をしていた我われのところにやってこられて、10 月 19 日にいよいよぶどう酒製造工場の起工式があること、来年 3 月末の建物の完成を目指しているが、間もなく冬がきて山地は雪にとざされるので 3 月末完成は難しいことを話していかれました。次の年にはこの川内の地で獲れたぶどうでワイン造りが始められるようになるか、気がかりです。

【課題】

一方、福島活動の同行者などもしばしば問題にしてきた支援活動対象の固定化を打開し、より広げていくことを今回の行動中も模索していましたが、成果は得られていません。

目下のところの障害は新型コロナウイルスです。感染者ゼロの福島県内山間部/過疎地などでは、

活動対象の固定化は、公益法人である SVCF の事業認定基準に悖ることもあります。今後ともあらゆる機会を捉えて拵げていくことに努めていかねばなりません。



【幅約 40cm、長さ 50～150m 往復のレインガード。樹列を往復して巻き取ると太さ約 30cm、重さ 10 キロ余の円筒になる。巻き取りがずれないように苦心を要する難作業で、白河の添田恵子さんの独断場】

公益社団法人福島原発行動隊